

1P65

コロナ休校に関連して発症した摂食障害5例の報告

田中 健佑、清水 真理子、諸田 慧、矢島 もも、
生塩 加奈、杉立 玲、安藤 桂衣、懸川 聡子、
溝口 史剛、松井 敦

前橋赤十字病院

新型コロナウイルス流行に伴い2020年3月より約3 ヶ月にわたった全国の小中学校、高校、特別支援学校の臨時休校（コロナ休校）は、児童思春期のこどもたちのメンタルヘルスに大きな影響を及ぼしたとされている。当院は、2次から3次の救急医療を担っている地域の基幹病院である。従来の感染症の入院患者が激減する一方で、こどもたちのメンタルヘルス不調に伴う諸症状による受診増加が顕著であった。

今回のコロナ休校に関連して発症したと考えられた摂食障害の小中学生を5例経験したのでここに報告する。

症例：男女比1：4。初診時年齢：7歳8 ヶ月から13歳5 ヶ月（中央値11歳7 ヶ月）。初診時診断：神経性やせ症（制限型）4例（標準体重比61%～90%）、機能的嚥下障害1人。入院治療2例（軽快退院、外来通院中）、外来治療3例（1例は治療完遂）。機能的嚥下障害の男児は分散登校中の簡易給食（パンと牛乳のみ）のパンにむせたことを契機に固形物の嚥下が不可能になった。器質的疾患を否定し、経腸栄養剤を処方し、外来で食べられるものを増やしていき軽快した。神経性やせ症と診断した4例の女児はいずれも初診時にい痩が認められた。休校期間中にステイホームで家族間の葛藤がより顕著になったことが誘因と考えられた。例年の発症率と比較して考察する。

1P66

性差を考慮した幼児版社会性・行動評価尺度の開発「クイズ」課題の適用年齢について

田中 駿¹、郷間 英世²、牛山 道雄³、郷間 安美子⁴、
石倉 健二¹

¹兵庫教育大学大学院

²姫路大学

³京都教育大学

⁴京都国際社会福祉センター

【はじめに】

我々は発達障害が注目され社会性や行動などの評価ニーズが大きくなってきていることから、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発を2014年より行っている。その中の課題の1つに「クイズ」がある。クイズは子どもになぞなぞをする課題で、言葉のやりとりやイメージする力との関係があると考えられる。本研究は、クイズ課題の通過率と50%通過年齢を算出し、適用年齢を検討したので報告する。

【方法】

対象は3歳48名、4歳45名、5歳48名、6歳53名の計194名である。クイズⅠ、クイズⅡ、クイズⅢのテーマと難易度の違う課題を作成した。クイズⅠは動物がテーマで、「耳が長くてぴょんぴょん跳ねる動物は何だ？」など、外見と身体の特徴を質問する。クイズⅡは乗り物がテーマで、「火事の時に火を消す車は何だ？」など、用途を質問する。クイズⅢは家にあるものがテーマで、「汚れた服やタオルを入れてきれいに洗ってくれるものなんだ？」など、用途を質問する。各課題に3項目を設定し、2項目以上正答の場合、課題を通過とした。

課題の通過率を算出し、通過率が年齢と共に上昇することを確認するため、カイ二乗検定および残差分析を行った。また、新版K式発達検査の通過年齢の算出方法を用いて、課題の50%通過年齢を算出した。

【結果】

クイズⅠの通過率は3歳から順に、56.3%、84.4%、95.8%、100%であった。同様に、クイズⅡの通過率は39.6%、68.9%、91.7%、96.2%であり、クイズⅢの通過率は16.7%、57.8%、81.3%、90.6%であった。残差分析より、クイズⅠ、クイズⅡ、クイズⅢ共に、3歳は有意に通過率が低く、5歳、6歳は有意に通過率が高かった（ $p<.01$ ）。

次いで、課題の50%通過年齢を算出した。クイズⅠは50%通過年齢が外挿計算となるため算出しなかったが、クイズⅡの50%通過年齢は45.7月（3歳9.7月）、クイズⅢは53.8月（4歳5.8月）であった。

【考察】

クイズⅠ、Ⅱ、Ⅲは共に年齢と共に通過率が上昇していた。また、50%通過年齢は、クイズⅠは外挿計算となったが、クイズⅡは3歳代、クイズⅢは4歳代であったことから、幼児期の課題として適切であると考えられた。また、それぞれ適用年齢に違いがあったことから、その年齢の発達を測定する課題として、含めることができると考えられた。